

# 松田道雄の保育問題研究運動論

——1960年代の『季刊保育問題研究』にみる

MATSUDA Michio's Theory on Childcare Research and Movement: Organizing His Writings in *Childcare Research Quarterly* in the 1960s

和田 悠  
WADA, Yu

**【要旨】** 松田道雄は関西保育問題研究会の会長として1960年代の保育問題研究運動に参加し、理論的支柱として運動を牽引した。だが、これまでの多くの松田論は、主著である『育児の百科』（岩波書店、1967年）の内容分析に重点が置かれ、保育問題研究運動の理論家としての側面に十分な光が当てられてこなかった。本稿は高度成長期の松田道雄の思想的経験として1960年代の保育問題研究運動に着目し、そこでの言動や思想の具体的内実の解明を課題とした。

本稿は、松田道雄の議論が「市民運動」として保育問題研究運動を性格づけようとするもので、研究運動の主要な担い手である保育者に対して、変革の主体としての「市民」として自己を形成することをもとめる構造になっていることを明らかにした。だが、松田の「市民主義」的な保育問題研究運動論は同時代にあっても、現在に直接連なる1970年代以降の保育問題研究運動にあっても、十分に受けとめられることはなかった。その意味で松田道雄の1960年代の保育問題研究運動論は「未完のプロジェクト」として私たちに差し出されている。

キーワード

松田道雄, 保育問題研究運動, 乳児保育, 集団保育と家庭保育, 文化運動としての保育, 市民

## はじめに

松田道雄といえば、戦後日本を代表する小児科医であり、『私は赤ちゃん』（岩波新書、1960年）、『育児の百科』（岩波書店、1967年）などの育児書の著者として広く知られている。また、独自の立場から「市民」「市民運動」の思想を展開した思想家、知識人として、小田実や久野収らと並べて語られることも多い。

しかしながら、関西保育問題研究会の会長として、1960年代の保育問題研究運動に積極的に

関与し、かつ重要な役割を果たしたことについては、これまでの主要な松田道雄論では蓋然的に触れられるのみであった<sup>1</sup>。そこで本稿は、1960年代の保育問題研究運動の牽引者で、理論的支柱であった松田道雄の言動と思想を主題とする<sup>2</sup>。

分析の素材とするのは、1961年に発足した全国保育問題研究連絡協議会の機関誌である『季刊保育問題研究』1号（1962年6月）～25号（1968年10月）である。

1950年代末から60年代初頭にかけて、名古屋、関西（大阪が中心）、高知、恵那、静岡などの各地域に保育研究サークルが同時多発的に結成され、1961年8月には恵那教育会館で各地域の保育研究サークルの代表者会議が開催された。代表者会議では、翌年の1962年8月に第1回全国集会を開催することと、機関誌を刊行することが決められた。1962年3月にふたたび代表者会議がもたれ、保育研究サークルの連絡会組織の名称を「全国保育問題研究連絡協議会」とすることが決まった。『季刊保育問題研究』はその機関誌である<sup>3</sup>。

『季刊保育問題研究』は、研究者による保育政策批判や情勢についての解説、保育の実践記録、保育施設における労働争議の記録、各地域の保育問題研究会の活動報告、海外文献の紹介、書評の記事などから内容が構成されていた。また、毎年8月に開催された「全国保育問題研究集会」（以下、全国集会と略する）の予稿集・報告集の性格を併せ持っていた。それゆえに、全国集会の全体会や分科会での議論内容や主題の推移を検討することができる。1960年代の保育運動を考えるうえで『季刊保育問題研究』は逸することのできない一次史料といえる。

以下では『季刊保育問題研究』に掲載された松田道雄と関西保育問題研究会に関する記事に限定して取り扱い、松田の保育問題研究運動論の歴史的な性格や特質を考察することに本稿の課題を限定したい。1960年代の保育問題研究運動の全体像の解明については別稿を期すことにしたい。

## 1. 先行研究と本稿の視点

近年、1960年代から70年代にかけての社会運動に関する歴史的研究が盛んになっている<sup>4</sup>。また、保育学研究者のあいだでも戦後保育運動史に関する関心が高まっている<sup>5</sup>。

こうしたなかで本稿の課題と深く関係するのは石月静恵の研究である。石月は1960年代の関西保育問題研究会および名古屋保育問題研究会の活動実態を実証的に明らかにし、同時代の保育問題研究運動が果たした理論化と役割を検討した<sup>6</sup>。それに対して本稿は、石月の研究を踏まえつつ、以下の2つの点で異なる接近を対象に対して試みる。

1点目は、松田道雄の言動と思想の側から1960年代の保育問題研究運動の意味を考察することである。

1960年代は『私は赤ちゃん』（岩波新書、1960年）で一躍有名になった松田が論壇で言論活動を積極的に展開していた時期である。『思想』、『世界』、『展望』、『思想の科学』などの雑誌で発言し、市民主義の思想的立場を明確にしていた。本稿の主題はあくまでも松田の保育問題研究運動における言動と思想である。だが、その射程は論壇での言動と照らし合わせることでより明確になるはずである。この作業は知識人による戦後思想の展開として、松田の保育問題研究運動論を論じることだと言い換えられる。

2点目は、「全国民間保育団体合同研究集会」発足に関する評価に関わる。

1969年8月、第8回の全国保育問題連絡協議会の全国集会がもたれるはずであった。だが、

「70年安保」をひかえて、保育問題研究連絡協議会傘下のサークルだけでなく、他の団体にもひろくよびかけ、父母、学生を含めて、ひろく保育の国民的運動の基礎をつくりあげよう<sup>7</sup>という声が運動の内部からあがり、「全国民間保育団体合同研究集会」（以下、保育合研と略する）と銘打つ大規模な集会が長野県山之内町でもたれることになった。

第1回の保育合研の参加者は1800人であり、前年の第7回研究集会の倍であった。保育合研はそれ以降も毎年夏の開催を重ね、参加者数も飛躍的に増えていった。第7回からは5000人に参加者を制限した。第3回の保育合研の準備から事務局を東京とし、半専従の事務局員も置かれるようになった。1971年に機関誌『ちいさいなかま』を発刊、1978年の保育合研開催時に「全国保育団体連絡会」が結成、翌年の1979年には保育研究所が設立され、『保育白書』が刊行された<sup>8</sup>。

石月の議論は1969年8月に発足する保育合研について、1960年代の保育問題研究運動の成長・発展した姿として評価するものである。この評価は、現在の民主的な保育運動の〈起源〉として1960年代の保育問題研究運動をとらえる歴史認識である<sup>9</sup>。だが、こうした歴史認識は、保育問題研究運動を保育合研へと合流させようとする動きに強く反対した保育運動家としての松田道雄を忘却するように作用したように思われる<sup>10</sup>。

かくして松田の言動と思想を軸に1960年代の保育問題研究運動の歴史的性格を素描しようとする本稿は、現在の保育運動を相対化する課題を背負うことになる。本論に入る前にこの点についての注意を喚起しておきたい。

## 2. 関西保育問題研究会の設立と松田道雄の会長就任

### (1) 松田道雄と戸田円八郎の出会い

まずは関西保育問題研究会の成立過程と松田が会長に就任した背景を明らかにしたい。

1950年代後半は、総評を中心とする労働組合運動、原水爆禁止運動や母親運動といった大衆運動が活発に展開した。1956年に第1回大阪母親大会が開催され、翌1957年には大阪母親大会の参加団体と総評大阪地方評議会婦人部が合同で保育所の増設および保育所での乳児保育・長時間保育の実施をもとめ、大阪市長に対して陳情を行なった。

1950年代末になると政府の保育所予算削減方針が強まった。そうした政策に反対する運動の側では「保育所を守る」という言葉がスローガンとなった。1959年11月、大阪で働く婦人の保育所要求大会が開かれ、そこで全大阪保育所を守る会が結成された。会長は大阪総評の副議長の西村清馬、副会長は大阪母親連絡会の代表と、大阪市の私立保育園である北田辺保育園園長の戸田円八郎が就いた<sup>11</sup>。

ここで指摘すべきは、戸田からの依頼に応じて、第1回働く婦人の保育所要求大会の記念講演者が松田道雄であった事実である<sup>12</sup>。

1950年代後半の松田は小児科医として「働く婦人の育児という新しい問題」に直面していた。『読売新聞』での育児相談を編んだ『育児日記』（文藝春秋社、1957年）のはしがきで次のように述べている。

最近はお赤ちゃんができて職場をやめない人がふえてきました。働く婦人の育児という新し

い問題がおこってきたわけです。働く婦人のための託児所がつかれないかぎりこの問題はうまく解決できないと思います。日中に八時間母親とはなれて生活することが幼児の精神的成長に不適当であるということになると、共稼ぎという家庭の形に大きな反省があることになるでしょう。こういう点は、これから働きながら子供を育てるお母さんたちと一しょに研究していきたいと思います<sup>13</sup>。

松田は1957年6月にソ連小児科学会総会に招待参加した。その後は、松田の希望でレニングラードに半月滞在し、保育園や幼稚園などの乳幼児の保育施設や小中学生を対象にしたピオニールを見学した。なかでも松田の興味をひいたのはレニングラード小児研究所の付属保育所での生後5、6か月のゼロ歳児を含む3歳未満児の集団保育であった。レニングラードでの見聞は帰国後まもなく訪問記として『朝日新聞』や『世界』で発表された。ソ連の政治体制について慎重な評価を下しながらも、ソ連で展開している乳幼児の保育の社会化、集団保育に対しては概ね高い評価をあたえた<sup>14</sup>。

こうした松田の発言に着目し、保育運動に松田を招き入れたのは戸田であった。戸田が園長を務めていた北田辺保育園は1953年に開園し、1957年に私立認可園となった。1958年6月から産休明け保育（乳児保育）を開始した<sup>15</sup>。北田辺保育園を松田が訪問したのは1959年の夏から秋にかけてのことで、以下のような感想を書き留めた。

保育園に子供をたのむのは、親に甲斐性がないからだというような卑屈なところの全然ない親たちがそこにいたのだ。

父親も母親もももにはたらき、はたらくことのなかに人間のよろこびを感じ、勤労のよろこびのなかで結びつき、そのよろこびのなかで次の世代を育てていこうという新しい型の親たちが生まれてきたのだ。

彼らは、お父さんが洗濯をしていると笑われても恥かしいと思わず、あのお母さんは子供をひとにあずけて自分はおめかしをしてつとめにいくと言われても屈しない<sup>16</sup>。

## (2) 「てのひらの会」から関西保育問題研究会へ

1950年代後半、総評労働運動を中軸に保育所運動が高まりを見せるなかで、関西保育問題研究会の直接の前身となる「てのひらの会」は1958年の夏頃に発足した。社会事業短期大学を卒業した若者20名ほどによる保育研究サークルで、それぞれの職場での経験交流や保育に関する学習を行っていた。参加者の多数を占めたのは大阪市の私立保育園である風の子保育園の保育者たちであった。そのひとりの樋口令子は、「理想高く、かつ悩み多い青春の日々の生き方を語り合い、交流し合い、励ましあう場」であったと、「てのひらの会」について述懐している<sup>17</sup>。

1959年5月に「集団保育と家庭保育」というテーマで研究会がもたれた。その際に助言役として参加したのが、風の子保育園の理事で、教育学者の鈴木祥蔵（関西大学）であった。鈴木は東京に保育問題研究会が存在していることを「てのひらの会」に伝えた。ここから関西にも保育問題研究会をつくらうという機運は急速に高まっていった<sup>18</sup>。

こうした経緯から、鈴木は関西保育問題研究会の設立を主導することになった。現場の保育関係者としてそれに全面的に協力したのが前出の戸田円八郎である。鈴木と戸田は大阪市の私立保

育園連盟でつきあいがあったと思われる。両者は城戸幡太郎が大阪に来訪した際に、研究会設立について城戸のもとへ相談にのってくれた。また、研究会設立にあたっては浦辺史からも助言を得ていた。浦辺は日本福祉大学の教員で、ヤジエセツルメント運動に端を発する名古屋保育研究会（1960年2月に研究総会を開催、1962年5月に名古屋保育問題研究会に改称）の中心メンバーであった<sup>19</sup>。

1960年11月に関西保育問題研究会は設立総会を開いた。会長は松田道雄、副会長は小川正通（保育学）と鈴木祥蔵が就いた。鈴木は事務局長を兼任し、事務局は鈴木の子の関西大学心理教育研究室に置かれることになった<sup>20</sup>。松田の会長就任を要請したのは戸田であり、松田はそれを快諾した。先述したように当時の松田は「共稼ぎ」の家庭の育児の問題や乳幼児の保育の社会化への問題関心が強かった。松田は会長に就任すると同時に、その役職の立場を最大限に活かして、関西での保育問題研究運動を大胆に推し進めることになった。その詳細については石月の研究に譲ることにしたい。

### 3. 1960年代の保育問題研究運動における松田道雄の言動と役割

表1は『季刊保育問題研究』に掲載された関西保育問題研究会会員による主要記事のタイトルを一覧にしたものである。表2は、1962年から1968年までの全7回開催された全国保育問題研究集会の記念講演者と講演タイトルの一覧である。本節では2つの表を手がかりに、1960年代の保育問題研究運動での松田の言動と役割について『季刊保育問題研究』から指摘できることを2点ほど述べたい。

1点目は、1960年代の保育問題研究運動の理論的支柱として大きな影響力を持ち、運動を実際に牽引したことである。

『季刊保育問題研究』に登場した関西保育問題研究会に所属した学者・研究者は3つの系統があった。1つは小児科医の松田道雄である。2つは教育学者の系列で、小川太郎、鈴木祥蔵、川口勇である。3つは社会福祉学者の系列で、社会科学の立場から保育労働や福祉政策について議論を展開した孝橋正一や小倉襄二である。そのなかでも『季刊保育問題研究』での松田の登場回数は断然多く、1960年代の保育問題研究運動をその言動と思想をもって牽引したといえよう。

全国保育問題研究連絡協議会の全国集会は1962年から1968年までの7回開催されている。第4回は記念講演という形をとらず、実行委員長挨拶であった。したがって全6回の記念講演が全国集会では行なわれることになった。松田はそのうち1963年と1967年と2度の記念講演を行なっている。また、1964年と1968年の2回の全国集会ではシンポジウムのパネリストとして登壇した。1965年の全国集会では「みんなが発言し、話し合える」機会を保障しようとインフォーマルなセッションとして「懇談会」が各テーマで3つ設けられたが、松田が参加した「家庭保育と集団保育」についての「懇談会」は大会参加者の半数以上が殺到してしまい、「マイクを使っただけのマンモス懇談会」<sup>21</sup>になった。この人気は著名人ということもあるだろうが、松田の発言がいかに運動のなかでもとめられ、そこに指針をもとめようとする参加者（保育者）が多かったのかを意味していよう。

表1 『季刊保育問題研究』における関西保育問題研究会の関連記事

号数	発行年	著者	タイトル
1	1962年6月	無署名	〈保問研だより〉関西保育問題研究会の概況
2	1962年9月	松田道雄	〈巻頭言〉いまの問題、これからの問題
3	1963年4月	鈴木祥蔵	〈巻頭言〉火はともった この火を消さないように頑張ろう
4	1963年6月	孝橋正一	保育政策への国民的要求
6	1963年9月	宍戸健夫	〈書評〉松田道雄編「新しい保育百科」
6	1963年9月	忠津玉枝	〈保問研だより〉関西保問研第2回会宿研究会報告
7	1963年12月	松田道雄	〈記念講演〉文化運動としての保育
7	1963年12月	忠津玉枝	全国集会に参加して
9	1964年10月	芝田不二男・天野章・岩崎きくえ・浦辺史・松田道雄・丸尾ひさ	〈シンポジウム〉今日の乳児保育を検討する
10	1964年12月	鈴木祥蔵	〈巻頭言〉幼稚園と保育所の統一
10	1964年12月	清水住子	1, 2歳児の保育——その実践
10	1964年12月	川口勇	幼児教育の目標としての「学令成熟」
12	1965年7月	関西保育問題研究会 (忠津玉枝)	保育を国民全体のものにしていくための保問研の役割りと運動のすすめ方 付表 関西保問研のあゆみ
13	1965年10月	忠津玉枝	〈箱根集会に参加して感じたこと〉第4回全国集会のこと
14	1965年12月	小川太郎	「保育所保育指針」所感
14	1965年12月	前田民子	「保育所保育指針」の発達観
15	1966年3月	孝橋正一	技術革新と保育政策
16	1966年7月	小川太郎	今日の教育運動と保育の課題
17	1966年10月	小川太郎	〈記念講演〉生活の教育の原則で幼児教育を
19	1967年7月	松田道雄	第6回全国集会をむかえて——大会テーマの意味
19	1967年7月	佐々木智子	保育現場からの報告
21	1967年10月	松田道雄	〈記念講演〉われわれの保育をはばむものは何か
22	1967年12月	小倉襄二	保育労働論——考え方の起点と条件について
22	1967年12月	関西保育問題研究会 (佐々木智子)	〈保問研だより〉京都集会後の動き
23	1968年5月	新田宏子	〈保育の現場から〉仮(無認可)保育所での一年
23	1968年5月	関西保育問題研究会 (佐々木智子)	〈保育者と父母の協力〉部落解放運動における保育所の役割——蛇草保育所の場合
23	1968年5月	宍戸健夫	〈書評〉松田道雄著『育児の百科』
25	1968年10月	海卓子・梶田福子・畑谷光代・宍戸健夫・松田道雄	〈シンポジウム〉自由と規律について

表2 全国保育問題研究集会の記念講演

回	年	開催地	講演者	講演タイトル
1	1962年	京都	宍戸健夫・一番ヶ瀬康子	就学前教育の発展のために——日本の社会と保育
2	1963年	名古屋	松田道雄	文化運動としての保育
3	1964年	高知	乾孝	あたらしい人間の創造——保問研の歩み・集団保育の意味・保育者の役割
4	1965年	箱根	鷺谷善教	(実行委員長挨拶)
5	1966年	東海	小川太郎	生活の教育の原則で幼児教育を
6	1967年	京都	松田道雄	われわれの保育をはばむものは何か
7	1968年	箱根	大槻健	指導要領の改訂と教育の軍国化

そのなかでも松田の第2回全国集会での記念講演「文化運動としての保育」は、大きな反響を呼んだ。「第2回全国保育問題研究集会報告書」として刊行された『季刊保育問題研究』第7号(1963年12月)の編集後記には次のような記述が残っている。

集会での松田さんの記念講演は、ふかい感めいを与えました。その後、名古屋ではその講演のテープがひっぱりだこになりました。「もう一度ききたい」とか「きけなかったのでぜひ」とかいうわけで、たくさんの集会でつかわれ、「文化運動としての保育」への認識をあらたにしました。この号では松田講演の全文を掲載しましたのであらためてその内容を味わってください<sup>22</sup>。

2点目は、ゼロ歳児からの集団保育を肯定し、その理論化を研究運動として組織しようとしたことである<sup>23</sup>。以下、この点にかかわって3つのことを指摘したい。

1つ目は、松田が全国集会の乳児保育の分科会に積極的に参加し、そこで保育者の実践報告に耳を傾け、保育者との忌憚のないディスカッションを通じて、乳幼児の集団保育の理論を探求していったことである。

1963年の全国集会の分科会「乳児保育における集団の役割をどう考えどう実践するか」の席上では、「もっと、学者もウンといわせるような、集団保育の効果の科学的データを出して、乳児保育理論をうちたててゆこう」<sup>24</sup>と参加者に呼びかけた。科学者らしく乳児保育の実践を積み上げるなかで理論化を試みようとしたのである。また、1967年の全国集会の分科会「子どもの生活はどうなっているか、その中で全面的発達を可能にする保育はなにか」では、「現在日本の小児医学では病気の子供の指導は出来ても健康な子供の分野の研究は重視されてない」、 「乳児保育を充実させるために「たんれん、が必要になってくる」<sup>25</sup>との主旨の発言を行なっている。

2つ目は、生後6カ月の乳児から集団保育を提唱し、女性労働者に産休6カ月の取得を職場で要求することを促したことである。

1964年の全国集会でのシンポジウム「今日の乳児保育を検討する」のなかで松田は次のような発言をした。

私は小児科医で毎日毎日赤ちゃんを連れてお母さんを見てますが、6カ月ぐらいまで赤ちゃんを育てているお母さんというのは、非常に楽しそうにみえる。だから赤ちゃんを6カ月育てるということは、非常に女性として苦勞して生んだお母さんとしては楽しいことだ。その6カ月間ぐらい楽しむ権利を、3日間の新婚旅行を楽しむ権利があるように、女性はやっぱり6カ月ぐらい子供と楽しんで育てる余裕があったほうがいいんじゃないか。6カ月お母さんの乳を飲ませるということは、その6カ月の中において、牛乳による過剰保育ということ、太り過ぎなんていうことも防げるだろう。そういう意味で、婦人労働者は人間的条件が無視されておるということをもっと並べなさい。そういう条件をもっとあげなさいということをお願いです<sup>26</sup>。

当時は産休6週間の時代であり、松田の発言は運動内部から「理想的」であるとの批判が出された。それに対して自らの発言が研究者の「自由な立場」からなされていることを了解した上で、

「理想を掲げることをおそれて」はならず、「一つの組織になって力を発揮する」ことがなければ現実を運命的に受け入れる以外になくなってしまうと応答した<sup>27</sup>。

乳幼児の集団保育を考えると、家庭保育と集団保育の関係をどうとらえるのかという問題であった。松田は「集団の中で個人がよく認められ」るような保育方法、集団づくりを提起する一方で<sup>28</sup>、家庭保育とは何か、子どもにとって家庭とはどういう場所であり、そこでのしつけはどうあるべきかという問題に直面することになった。つまりは、乳幼児の集団保育を理論化する作業は、家族という人間関係を問い直し、家庭保育の質やあり方を考究することにつながっていたのである。これが3つ目のことである。

松田は前出の1964年のシンポジウムで、「亭主関白といわれていることも、単に男性が男女平等の憲法を理解していないというんでなしに、やはり会社の中で、社会の中でいろいろ理詰めやってきた世界からいやになって、うちへ帰ってきて、始めて自分のこの世界へ帰る、その個の世界を許してやるべきであるというふうにいまままで考えてきた」ことを「少し訂正しなくちゃならんと思う」と反省の弁を述べた<sup>29</sup>。

この語りからは、当時の松田が「夫は外で働き、妻は家事・育児に専念する」という性別分業意識から自由ではなかったことわかと同時に、私的領域における情緒や性別分業家族における親密性をとらえ返す視点が萌していることを看取することができる。

残念ながらシンポジウムでは家族の人間関係のあり方や、家族のなかで子どもの人権や個人の自由をどう保障するのかという論点をめぐって議論が展開することはなかった。また、その後の松田がこの論点をどのように深めていったのか、あるいは忘却していったのかは別途の検討を要する。

ところで、1968年の第7回の全国集会の記念講演は教育学者の大槻健が人選された。それまでの記念講演は保育問題研究運動の関係者であった。だが、大槻はそうではなかった。講演内容についてみると大部分が小学校・中学校の学習指導要領に対するイデオロギー批判にあてられ、これまでが保育問題や幼児教育をテーマにしてきたのに比べると極めて異質だった<sup>30</sup>。大槻の議論は、「権力的に教育政策を壟断する反動的な政治勢力と、戦後改革の理念を擁護する民主的な革新勢力との間で、妥協の余地ない対立抗争があったとみる、二元的な図式」<sup>31</sup>の典型のようなものであった。

こうした発想と論理は、1969年からの保育合研の運動を用意したものであり、また保育合研に受け継がれたものと思われる。ここで注目すべきは、松田は保育問題研究運動の保育合研への合流に反対し、1968年を最後に全国的な保育運動から離れたことである。1年前の1967年の記念講演が松田であったことを考慮すれば、記念講演における松田と大槻との断層が問題となる。これについては次節で検討したい。

#### 4. 松田道雄の2つの記念講演

先に述べた通り松田道雄は全国集会での2回の記念講演を行なった。1回目は1963年の「文化運動としての保育」、2回目は1967年の「われわれの保育をはばむものは何か」である。松田の記念講演は全国集会の参加者に向けられ、同時代にあって保育問題研究運動は何をなすべきかを問いかけるものであった。そこには松田の同時代の保育問題認識と保育運動論がよく表れている。



以下では、松田の問題関心の推移に着目しつつ、1960年代前半と後半とに行なわれた2つの記念講演の内容を検討し、その特質を明らかにする。この作業を通じて同時代の保育問題研究運動の歴史的 성격や立ち位置を浮かび上がらせたい。

### (1) 「文化運動としての保育」<sup>32</sup>

松田にとって保育問題とは同時代の日本社会における幼児期の人間形成の問題であり、それが高度成長の社会のなかで危機に陥っているとの認識を強くもっていた<sup>33</sup>。

松田は、「現在の日本の多くの家庭が、近代的小家族化して、孤立して、密室化するにしたがって、子どもは肉親だけを中心にエゴイズムのなかで教育され、自分さえよければいいというエゴイストになりつつある」との現状認識を示し、「自分さえよければいい、自分の肉親だけがらくな生活ができれば他人はどんな困ったってかまわないという人間ばかりができてしまったら、日本の文化は墮落するよりほかはない」との強い語調で幼児教育の今日的あり方について警鐘を鳴らした。

こうした現状認識に立った松田が目し、期待をかけたのが保育所や幼稚園における集団保育（集団教育）であった。集団保育は家庭保育を「補完」するものではなく、子どもの人間形成にとって両者がともに必要であり、重要であるというのが松田の保育問題についての基本的な認識であった。

松田のこうした保育問題認識は同時代の政府のそれと鋭く対立するものであった。1963年7月、厚生省中央児童福祉審議会保育制度特別部会は「保育問題をこう考える－中間報告－」を発表し、保育7原則を掲げた。集団保育を表立って否定することはなかったが、家庭保育が原則であることを強く滲ませる内容となっていた。その翌月の1963年8月には厚生省中央児童福祉審議会家庭対策部会が「家庭対策に関する中間報告」を提出するが、そこでは「人づくりの基本は家庭から」ということが強調された。

「文化運動としての保育」という講演タイトルは松田がつけたものである。当時からしても耳慣れないタイトルであったといえようが、「文化運動としての保育」ということで一口に言おうとしたことの中には、次の3つの主張が含まれていた。1つは保育問題研究運動を「政治運動」と区別される「文化運動」として展開すべきだという主張、2つは保育所づくり運動を「文化運動」として展開すべきだという主張、3つは集団保育を「文化運動」として展開するべきだという主張、であった。

第1に保育問題研究運動についてである。松田は保育問題研究運動の性格規定を「革新運動」、  
「労働組合運動」との違いを明らかにすることで行なおうとした。

「革新運動」との違いという点では、松田は原水爆禁止運動を引き合いに出し、それが「政治運動の形をまねることによって、文化運動のもっていた自由を台なしに」した事例であるとした。それに反して、保育問題研究運動は「中央集権という組織の力よりも、自由に活動できるという人間の創意を大事にしなければなりません。／中央からの指令で動かすというのではなく、地方に分散している人たちの独創性によってうごくものでなければなりません」と述べた。

松田は「反組織」の立場に立っていたわけではない。全国保育問題研究連絡協議会の結成について決して否定的ではなかった。だが、全国組織化のあり方において原水爆禁止運動と同じ轍を踏むことがあってはならないと考えていた。松田はそれぞれの地域の保育問題研究会のネット

ワーク型組織として全国保育問題研究連絡協議会を構想していたのであり、そこでの研究運動はあくまでも「文化運動」として展開される、つまりは「各人の創意と独創とが生かされ」なくてはならないとした。

以上の議論を踏まえれば、「保育問題研究会を、保母の労働者としての組織としてみたくなる誘惑が強いのですが、この誘惑からは卒業しなければなりません」という松田の発言の含意も見えてくる。松田が想定していた保育問題研究運動の主体は集団的な主体である「労働者（階級）」ではなく「個人」（市民）であり、「文化運動」（研究運動）である以上、「研究活動に積極的なメンバーをしっかりととらえて、質としていい研究をつづけること」に使命があると考えていたのである。

急いで付け加えておきたいことは、松田が保育の労働組合運動に対して決して冷淡ではなかったことである。松田は記念講演のなかで、「日本の多くの労働組合が、女性労働者の労働条件をもっとよくすることについて本腰を入れないのは残念で」あり、「女性をもっと活動させようとすれば、男性のはたらく人の組織が、男性エゴイズムから抜けだすよりはかは」ないことを指摘した。公立保育園の保育者もそうであるが、それにまして私立保育園の保育者の労働条件の劣悪さに松田は心を痛めていた。

マルクス主義者であった松田は労働組合について社会変革の主体として期待を寄せていたように思われる。だが、1960年代の保育問題研究運動にかかわるなかで、労働組合運動が男性中心主義であることに気づき、その期待は絶望へと変わっていった。こうした認識の転換は松田を「革新運動」から遠ざけたと同時に、松田流フェミニズムの思想的経験にもなっていた<sup>34</sup>。

第2に保育所づくり運動についてである。記念講演で松田が保育所づくり運動のひとつのモデルとして言及したのは、大阪府枚方市香里団地で展開した香里ヶ丘文化会議による保育所づくり運動であった<sup>35</sup>。香里ヶ丘文化会議（初代代表は京都大学人文科学研究所の多田道太郎）は1960年9月に発足し、松田を理論的支柱にして保育所づくり運動に取り組んだ。その結果、1962年7月に枚方市立香里団地保育所が開設され、1962年9月からはゼロ歳児からの乳児保育と長時間保育が実現した。同時代の保育運動のなかで香里団地の保育所づくり運動は注目を集めていた。

ここで指摘すべきは、松田が「住民の文化運動として保育所をつくることに成功した」と記念講演で述べていることである。香里ヶ丘文化会議の保育所づくり運動の実態と照らし合わせれば、ここでいう「住民の文化運動」を「住民の市民運動」と言い換えたところでなんら遜色はない。松田は「市民運動」としての保育所づくり運動が全国的に広がることで、「市民」的な人間関係を地域社会のなかから生み出すことに期待をしていた。

香里ヶ丘文化会議のスローガンは「コンクリートの壁をこえて生活の向上をめざす文化運動を」であった。推察の域を出ないが、「文化運動としての保育」という講演のタイトルはここから借用したのではないと思われる。

第3に集団保育についてである。松田は記念講演のなかで「保育所は、子どもにとって小さな社会であり、子どもに社会的に生きる方法を教える場所」とであると定義した。そこで問題になるのは子どもによって生きられる社会の質であり、「幼児の集団保育でいちばん力を入れなければならないのは、集団づくりである」ということになる。

文化運動としての「集団づくり」＝「社会」という観点をとれば、次に問題となるのは保育者

が保育をつうじてどのような集団＝社会をつくろうとしているのか、次世代を形成する子どもをどのような人間として育てようとするのかという保育者の教育理念や思想、世界観であった。保育という営みが、既存の社会のなかでこれからの社会を形成しようとする文化的営為であるからこそ、保育や保育者はイデオロギーの問題を避けて通れないというのが松田の「文化運動としての保育」論の重要な核心であった。

無思想の、没イデオロギーの保育者では同時代の危機的な幼児期の人間形成の問題に太刀打ちできない。松田は皮肉たっぷりに「保育所や幼稚園は、子どもをあずかって、適当にやってさえいれば、金もうけ文化は、週刊誌やテレビを通じて、保育者や親たちにこの民主主義社会のありがたさを教育してくれるでしょう。安定した職制の体系、官僚の制度が教育者たちをはねあがるのをおさえてくれるでしょう」と現状のある一面を描き出した。

ひるがえって松田は保育問題研究運動を担う保育者に対して、支配的文化（金もうけ文化）に対して批判的であることを、つまりは、権力に抵抗する「市民」として生きることをもとめた。松田は「精神に一定の硬さを要求する」との独特な表現で保育者の主体形成への期待を語った。

このように1963年の記念講演「文化運動としての保育」は、松田の「市民主義」の発想と論理に裏打ちされた議論であったといえる。より正確に言えば、松田は保育問題研究運動を経験するなかで「市民主義」の発想と論理をつかみなおしていった。そしてそれは「文化運動」を「政治運動」に従属させてきた、かつて松田が体験した「ロシア型マルクス主義」を批判的に総括する思索、つまりは松田流のスターリン批判とも連動していた<sup>36</sup>。

だが、このような議論として「文化運動としての保育」が同時代の保育問題研究運動のなかで深刻に受けとめられた形跡は『季刊保育問題研究』には見えない。それは松田と保育問題研究運動で活躍した保育者との世代的断層であるようにも思われる。松田の名声とともに、「文化運動としての保育」という言葉は同時代の保育問題研究運動のなかに広く知れ渡った。だが、その意味が、思想性が、必ずしも十分に理解されたとはいえない。松田の問題提起は未発の契機として1960年代の保育問題研究運動のなかにいまも凍結されてあるように私には思われる。

## (2) 「われわれの保育をはばむものは何か」<sup>37</sup>

松田は1967年8月の全国集会に臨むにあたって、「子どもは、おさない人間として、その発達に応じた教育をうける権利をもっています。この権利をまもることが保育です」と明快に宣言した。記念講演ではこの権利を実質的に保障していくために必要な条件や課題とは何かを保育問題研究運動に対して問い、「一時あずかり」とは異なる「われわれの保育」の実現を現在阻むものを明るみに出すことで、それを克服する運動の道筋を指し示そうとした<sup>38</sup>。

松田は、「われわれの保育」を阻むものを、保育の物質的基盤の貧困に求めた。記念講演のなかで繰り返し「最低基準」に言及し、その底上げなくして権利としての保育を保障することはできないことを強調した。1965年8月に厚生省は「保育所保育指針」を制定し、保育所における保育内容や保育所運営に関する基本的事項を示した。だが、松田は、「「保育指針」にしめされたような目標を達成することは、保母の超人的な努力なしに不可能」であり、物質的な条件が整備されない現状にあっては「保母の個人的な怠慢を難詰する手段になってい」と痛烈に批判し、「保育所保育指針」がもつイデオロギー的性格を暴いて見せた。

なぜ、「最低基準」は変更されないのか。松田は、「保育園に子どもをたのんでいる母親が、臨

時工的な労働条件ではたらく、保育園ではたらく保母の労働条件も、臨時工的であるというところに、げんざいの保育をはばむ、根本的な原因がある」との認識を示した。言い換えれば、女性を補助労働力として活用しようとする政府の労働政策、経済政策に問題の本質を見出していたといえる。したがって「長時間保育」をめぐる「働く母」と保育者（保母）が対立する立場に置かれるのは見かけ上の対立構造であって、そこに本質はなく、むしろ、両者が「手をつなぐ」ことが権利としての保育を保障する前提条件であると議論を進めた。こうした議論は男性労働者に抗する女性労働者のあいだの連帯を促し、男女の雇用と賃金における平等を求める射程を含んでいたといえる。

また、松田は1963年の「文化運動としての保育」の議論を受けて、「保育所づくりの運動が地域の文化運動でありうることも事実ですが、それだけではだめです。最低基準をおしあげるまで保育所づくり運動は永久化すべきです」と発言したことも合わせて紹介しておきたい。

それでは、こうした現実や課題に保育問題研究運動はどのように対応すべきなのか。運動の担い手と方法の問題が出てくる。それに対して松田はこれまでの6年間の保育問題研究運動の経験を踏まえて以下のように試論を展開した。

まずは担い手について。松田は保育問題研究会で活動するタイプの保育者を以下の4つに類型化した。

1つは、「保育をよくするには、特定の政治の党派の指導のもとにはいられなければならない」と考える人たち。松田に言わせれば、「そうしたやり方では、少なくとも保育問題研究会にかんする限り、大衆化することはでき」なかったという。2つは、「保育におけるさまざまな支障を、もっぱら保育現場の技術的な操作をもって、のりこえていくことをかんがえた人たち」。松田は「技術派」と名づけた。こうした人たちは保育問題研究会の批判的性格についていくことができずに脱落していく傾向にあった。3つは、「公立の保育園で、自治体の組合に加入し、組合員として活動している人たち」。松田はこのタイプの人たちについて、保育問題研究会に固有の意味や可能性を見出せていないとみなした。4つは、松田が言うところの「青春行動派」であり、「わかくて、エネルギーにみち、正義感にもえ、子どもに深い愛情をもっている人たち」のことを指している。

松田は保育問題研究会の最大の問題は、「青春行動派」をいかに組織し、それを保育の現場にとどめるか」にあると述べた一方で、現実的には「青春行動派」の保育者は保育の物質的な基盤の貧困の前に離職を迫られる傾向にあることを認めた。だが、「青春行動派」として参加しながら、いつまでも、その若さとエネルギーを持続している人たちが」いるとし、そういう人たちは「共同保育から出発した私立保育園」、あるいはまた「同和地区の公立保育園」の保育者であるという事実を指摘した。しかも、こうしたところでは保護者が保育者と協力しながら保育園が維持、運営されていた。松田は以上の事実の意味を深く掘り下げることが今後の保育問題研究運動の課題であると提起した。ここでは当時の松田のなかに共同保育所運動への関心の芽があったことを指摘しておきたい。

次に運動の方法について。松田は記念講演を以下のように締めくくった。

問題を、その当事者たちの生活の問題として解決していく、その経験を、世界的に、つないでいくことのなかに、新しい解決の展望がひらけてくるという期待をもつことです。

アメリカにおける黒人の姿勢がそうです。ベトナムにおけるベトナム人民の姿勢がそうです。またそれを支援する世界中の名もない市民の、市民の、自発的な運動の姿勢がそうです。

それらに共通していることは、支配権力にたいする、人民の権利の擁護ということであり  
ます。

私は、この全国集会で、日本人民の権利がまもられることを期待するものであります。

ここでの松田の議論には、1965年に結成された「ベ平連」(ベトナムに平和を！市民連合)の運動の志向性が影を落としている。1960年代後半の松田は保育問題研究運動と「ベ平連」の2つの運動に足場をかけており、「ベ平連」には強い共感をもって参加していた。

松田は問題を一気に解決することを志向する、上からの権力的な社会変革の発想と論理は「支配の論理」にほかならず、それに対して「市民(人民)」による「抵抗の論理」による社会の変革(改良)を対峙した。管理社会化の進む同時代の日本社会にあって社会を変革するには市民(個人)が下から少しずつ変えていく以外にないと考えていた<sup>39</sup>。

保育問題研究運動についていえば、日本における保育問題の全体性を見渡したうえで、保育の現場から、子どもの権利としての保育を実現するために思索し、行動し、連帯することが最終的に保育問題を解決していくことになるとの見通しに立っていた。

## おわりに

本稿では、1962年から1968年までの『季刊保育問題研究』を通覧したうえで、同誌に掲載された松田道雄の2つの記念講演に照準を合わせてその特質や射程を読み解き、松田の保育問題研究運動論の歴史的な性格を明らかにしてきた。

変革の主体として「市民」を理論化する立場を「市民主義」と呼ぶのであれば、1960年代の松田道雄は「市民主義」の知識人であった。1963年の時点では「文化運動」という表現を用いたが、現在でいえば「市民運動」として保育問題研究運動を位置づけ、それを推し進めようとしたのが松田であった。そして保育問題研究運動の担い手(主に保育者)に対して、「市民」としての主体形成を求めた。もっとも松田は同時代の保育者が置かれていた労働条件の貧困についても深い理解をもっていた。以上のことを踏まえれば、松田の「市民主義」は階級性を排除しない、具体的な変革思想であったことが見えてくる。

松田が保育問題研究運動において重視したことは人間の自由や自発性であり、運動に携わる人たちの創意や工夫であった。そして自由な人間による社会的連帯によって権利としての保育を保障しようとした。松田の議論には非政治的な市民の政治的関心という逆説によって支えられる民主主義論が基盤にあった<sup>40</sup>。ひるがえって松田は、「文化運動」(=「市民運動」)である保育問題研究運動が党派の指導を受ける組織と化すことを非常に警戒した。そうした時に保育問題研究運動は運動としての固有性や社会変革能力を失うとの判断に立っていたからである。

しかしながら、1960年代の保育問題研究運動の現実、松田の眼からすれば危惧する方向へと次第に向かっていった。1969年の保育合研への合流は「文化運動」が「政治運動」へと従属していく局面として把握されたのではないだろうか。松田が合流に強く反対し、1969年以降は全国的な保育問題研究運動に参加しなくなった所以である。とはいえ、いまここで松田の議論だけ

をもって保育合研運動を否定的に総括することは早計であろう。だが、松田の離脱は1960年代の保育問題研究運動の歴史の変質を意味していることは間違いない。

本稿の成果は『季刊保育問題研究』における松田道雄の視点に内在し、1960年代の保育問題研究運動の一断面を解明した点にとどまる。松田が会長をつとめた関西保育問題研究会の実態解明を含む1960年代の保育問題研究運動の全体像を明らかにしてこそ、松田の1960年代の「栄光」と「敗北」の意味はより深く理解できるだろう。それが次なる課題となる。

## 註

- 1 たとえば、桜井哲夫「子どもに自由を——松田道雄の仕事」同『可能性としての「戦後」』講談社、1994年、天野正子「松田道雄『育児の百科』」岩崎稔・上野千鶴子・成田龍一編『戦後思想の名著50』平凡社、2006年、河合蘭「松田道雄——母親たちとともに」栗原彬編『ひとびとの精神史3 60年安保——1960年前後』岩波書店、2015年、など。
- 2 宮坂広作「松田道雄の幼児教育論」『京大大学生涯教育学・図書館情報学研究』第6号、2006年3月、は本稿の問題関心と触れ合うところが多い。ただし、宮坂が松田のテキストから幼児教育論を析出することを課題にしたのに対して、本稿は保育問題研究運動のなかの思想的営為を問題にする。
- 3 全国保育問題研究連絡協議会編集委員会「この機関誌について」『季刊保育問題研究』第1号、1962年6月。
- 4 たとえば、広川貞秀・山田敬男編『戦後社会運動史論②——高度成長期を中心に』大月書店、2012年、安藤丈将『ニューレフト運動と市民社会——「60年代」思想のゆくえ』世界思想社、2013年、大野光明『沖縄闘争の時代1960/70』人文書院、2014年、など。
- 5 浅野俊和「戦後日本の「保育運動史」——その研究の意義と課題」『幼児教育史研究』第8号、2013年11月、など。2012年の幼児教育史学会第7回大会のシンポジウムのテーマは「幼児教育史における保育運動史研究の意義」であり、同論文はそのシンポジウムでの基調報告を活字化したものである。
- 6 石月静恵「1960年代の保育問題研究活動」広川貞秀・山田敬男編『戦後社会運動史論②——高度成長期を中心に』大月書店、2012年、同「保育問題研究会の成立と活動——名古屋を中心に」『桜花学園大学人文学部研究紀要』第14号、2012年2月。全国保育問題研究会が果たした理論化と役割としては、「乳児保育の理論化」と「保育者の要求と組織化」の2点を挙げています。
- 7 穴戸健夫「全国民間保育団体合同研究会について」『季刊保育問題研究』第27号、1969年5月、68頁。
- 8 前掲、石月「保育問題研究会の成立と活動」9頁。
- 9 典型的な語り口として、逆井直紀・実方伸子編『保育の理論と実践講座5 保育をつくる運動と希望の実現——ネットワークをどうつくるか』新日本出版社、2009年。
- 10 拙稿「忘れられた保育思想家、松田道雄のこと」『保育情報』第421号、2011年1月、1頁。
- 11 戸田円八郎「関西保研設立のころ」大阪保育問題研究会『保育に科学の光を——関西・大阪保育問題研究会30年の歩み』1991年、12頁。
- 12 前掲、石月「1960年代の保育問題研究活動」242頁。
- 13 松田道雄『育児日記』（文藝春秋社、1957年）、3頁。
- 14 拙稿「松田道雄と集団保育の〈発見〉——1960年代の保育運動のなかで」大門正克ほか編『高度成長の時代3 成長と冷戦への問い』大月書店、2011年、209頁。
- 15 戸田円八郎・戸田節子『どっこい北田辺は生きつづけた——大阪市・北田辺保育園の産休明け保育25年のみのり』さ・さ・ら書房、1980年、を参照。
- 16 松田道雄「やみの中の一すじの光——北田辺保育園で感じたこと」『子ども部屋』第1巻第7号、1959年10月。
- 17 樋口令子「てのひらの会」のこと」前掲、大阪保育問題研究会『保育に科学の光を』10頁。
- 18 前掲、石月「1960年代の保育問題研究活動」243頁。東京の保育問題研究会は1953年に結成されていた。その研究活動に影響を受けて1950年代末に名古屋と関西にて、お互いが連携をしながら保育問題研究運動が同時的に立ち上がった。

- 19 同上。
- 20 発足当初の会員は約150名であった。1年後の1961年11月の総会時点で328名に倍増した。1962年11月の総会では430名の会員を数えた。ここが会員数のピークであった。その後会員数は漸減するものの、研究会が解散する1970年頃まで会員数が300名を切ることはなかった。会員の構成については、1962年の時点では「保育所保母、研究者、母親（労組婦人部）、幼稚園、教諭、一般」の順であり、「会員構成で関西の特色の一つは母親、労働婦人の参加が多い」ことが報告されている（無署名「関西保育問題研究会の概況」『季刊保育問題研究』第1号、1962年6月、55～58頁）。
- 21 「懇談会 家庭保育と集団保育」『季刊保育問題研究』第13号、1965年10月、57～58頁。ちなみに文末に（まとめ・伊東）と記されている。
- 22 「編集後記」『季刊保育問題研究』第7号、1963年12月、99頁。
- 23 穴戸健夫は『育児の百科』の書評で、平井信義が全国社会福祉協議会乳児福祉協議会編『乳幼児集団保育の手引』（日本小児医児出版社、1967年）の第1章「集団保育について」を執筆し、ジョン・ポウルヴィヤルネ・スピッツらの研究を根拠にして3歳未満児の集団保育について否定的な見解を呈していたのに対して、「松田さんのこの本は保育者たちの実践から学びながら、乳児からの集団保育が大きな成果をあげていることを明らかにしています。そこには平井氏などとは根本的に異なる考え方があります」と述べている（穴戸健夫「松田道雄著『育児の百科』」『季刊保育問題研究』第23号、1968年5月、31頁）。
- 24 丸尾ひさ「乳児保育における集団の役割をどう考えよう実践するか」『季刊保育問題研究』第7号、1963年12月、23頁。
- 25 窪田佳世子「第2分科会 子どもの生活はどうなっているか、その中で全面的発達を可能にする保育とはなにか ①乳児の集団保育の中で「たんれん」をどう考えるか」『季刊保育問題研究』第21号、1967年10月、43頁。
- 26 芝田不二男・天野章・岩崎きくえ・浦辺史・松田道雄・丸尾ひさ〈「シンポジウム」今日の乳児保育を検討する』『季刊保育問題研究』第9号、1964年10月、34～35頁。
- 27 同上、「今日の乳児保育を検討する」35～36頁。
- 28 佐藤文枝・木村昭栄「今日の子どもを全面的に発達させる保育方法の探求」『季刊保育問題研究』第3号、1963年4月、20頁。
- 29 前掲、「今日の乳児保育を検討する」39頁。
- 30 大槻健「指導要領の改訂と教育の軍国化」『季刊保育問題研究』第25号、1968年10月、16～27頁。
- 31 森田尚人「序文」森田尚人・森田直子・今井康男編『教育と政治——戦後教育史を読みなおす』勁草書房、2003年、iii頁。塩崎美穂〈「書評」橋本宏子著『戦後保育所づくり運動史——「ポスト」の数ほど保育所を」の時代』『幼児教育史研究』第2号、2007年11月、も参照のこと。塩崎の書評は戦後保育運動史研究を「戦後歴史学」「戦後教育学」とは異なる歴史的想像力で捉え返すことで豊富化することを提案するものであり、示唆に富む。
- 32 松田道雄「文化運動としての保育」『季刊保育問題研究』第7号、1963年12月、2～18頁。以下、論文の性格と読みやすさを考慮し、同論稿からの引用はいちいち注記をしなかったことを断っておきたい。
- 33 松田は以前に「保育問題研究会が、保育学研究会だったら私は参加しなかったろう。私は日本の保育が現在かかえている問題が小児科学と関係があると思うので参加した」と述べている（松田道雄「いまの問題 これからの問題」『季刊保育問題研究』第2号、1962年9月、1頁）。
- 34 天野正子は石川三四郎、花森安治、大熊信行、松田道雄の4名をとりあげ、「戦後を生きた、フェミニズム「以前」の男性フェミニストの思想的系譜」を描いた。天野正子「男性フェミニストのフェミニズム「前史」」阿部恒久・大日方純夫・天野正子編『男性史3 「男らしさ」の現代史』日本経済評論社、2006年を参照。
- 35 拙稿「1960年代の保育所づくり運動のなかのジェンダー」『歴史評論』第722号、2010年6月、同「ジェンダーの視点から戦後保育所づくり運動史を問う——1960年代の大阪府枚方市香里団地を事例に」『日本オーラル・ヒストリー研究』第7号、2011年9月、同「香里ヶ丘文化会議による地域社会づくり——1960年代前半の団地における「市民」と市民運動」『社会文化研究』第15号、2012年12月、を参照。
- 36 拙稿「昭和史論争のなかの知識人——亀井勝一郎、松田道雄、遠山茂樹」大門正克編『昭和史論争を

- 問う——歴史を叙述することの可能性』日本経済評論社，2006年，同「松田道雄における市民主義の思想的経験」『哲学から未来をひらく2 生きる意味と生活を問い直す——非暴力を生きる哲学』青木書店，2009年，を参照。
- 37 松田道雄「われわれの保育をはばむものは何か」『季刊保育問題研究』第21号，1967年10月，4～21頁。以下，論文の性格と読みやすさを考慮し，同論稿からの引用はいちいち注記をしなかったことを断っておきたい。
  - 38 松田道雄「第6回全国集会をむかえて——大会テーマの意味」『季刊保育問題研究』第19号，1967年7月，3頁。
  - 39 松田道雄『革命と市民的自由』筑摩書房，1970年，を参照。特に同書に所収の「支配の論理と抵抗の論理」は松田の「ベ平連」論として，「変革の必要性と可能性」は松田が1960年代末の保育問題研究会を公然と批判した論稿として重要である。
  - 40 松田は丸山真男の思想的影響力を強く受けている。松田の「市民主義」は丸山の「市民の政治学」のひとつのバリエーションと考えることもできる。